

シェルストビートフは、「名もなき市井の民」ながら、いかにもロシア的な、「信仰心が篤く、高潔で、「清貧」という言葉を文字どおり体現した人物」で、超俗の風格があった。犀星との東京とハルビンでの交遊ぶりも、何とも好ましい。

彼の最期について諸説あるとか、関東大震災の際彼が無断で持ち出したという伝説をめぐると不思議なエピソードとかも、いかにもこの人らしい。謎のままおくほうが、生の深淵を垣間見る感があって、かえって良いように感ずるのである。

白系ロシア人の文献に通読した沢田さんの頭の中では、きっと、もろもろの人物や出来事がひしめき、うごめいているに違いない。それらがさまざまな物語となって甦る日が、しきりに待たれるのだ。

最後に、第1章中の「ソ連のイメージ」について一言。「ソ連のイメージ」は複雑なテーマだから、それを本書で引証されている3冊の書に代表させるのには、大いに疑問がある。白系ロシア人に対すると同様に、体系的実証的に検討すべきだと、考える。その暁には、白系ロシア人もまた相関的に新しい相貌を見せるのではないだろうか。

【新刊書評】

長縄光男著『ニコライ堂遺聞』

成文社、2007年3月、3800円

清水 俊行

同著者による日本正教会研究の初穂ともいえる『ニコライ堂の人々』（1989年）が出版されてから、はや18年が過ぎ去った。だが、その後発表されたこのテーマに関する同氏の研究業績を一瞥すると（それらが本書を構成しているのだが）、その穂はますます大きく膨らみ、これがはや一世紀半になりなんとする日本正教会史において中心的役割を果たしてきたロシア人宣教師と日本人正教徒の活動に関する、最も信頼に足る研究として実を結んだことを実感させてくれる。同氏は本書を前著の「姉妹編」と称しているが、こうした息の長さこそ、日本正教会の成立と、その中で営みを続ける「人間」に向けられた関心の焔が、氏の主要テーマであるゲルツェン等19世紀ロシアの思想家に対する視点と時に睦み合いながらも、途切れることなく燃え続けたことの証しであろう。少なくとも、18年前に日本正教会の一イデオログをめぐって開始された探索が、「正教会」という特殊な社会の中に封印されてきた「日露関係史」の解明に接ぎ木されたことで、もはや他人事ならぬ、氏御自身の歴史観を「自己表出」するための格好の土壌を得たことは確かなのである。

本書で扱われているテーマは、日本正教会の設立者たる宣教師ニコライについてはもちろん、その同労者であったロシア人司祭マホフやアナトーリイ等をめぐると知られざる真実、初期函館教会をめぐると諸事実、日本正教会の文化的営みを表す様々な側面、ニコライ自らが携わった語学教育の実態に始まり、日本正教会の最盛期にあたる70-80年代を象徴する高清水教会（宮城県）の



歴史、ニコライを支えた修道司祭アナトーリイの巡回日記やニコライ自身の日記、更には、ニコライを脇で固めた日本人同労者や弟子たちの活動、そして日露戦争と正教会の関係、最後にニコライの後継者セルギイ府主教の悲運といった具合に日本正教史を織りなすほぼすべての時期に亘っている。従来、日本正教会に関する研究史がもっぱらニコライを中心に行われてきたことを思えば、このような全体に対する目配りは、著者の正教会に対する関心が「ニコライの教会」という一現象に限局されているのではなく、それらの営みを取り巻く日本の社会史、ひいては精神史といった背景を漏れなく視野に入れた学際的な研究のスタイルを取ろうという意志の表れともとれる。

もちろん、著者も断っているように、これが「日本正教史」のすべてではない。しかし、今となっては決して潤沢とはいえない史料を手がかりとして、また先行研究の中ではほとんど利用されることのなかった内外の一次史料にあ

たることによって、これまで定説とされてきたことがらを含めすべてを洗い直し、「日本正教史」再考のための新たな鳥瞰図を描こうと試みることの意味は大きいと言わざるをえない。実際、それらの史料へのアプローチから分析に至るプロセスを丹念に読みすすめていけば、歴史とは往々にして、大事件や政治交渉の表舞台によってのみ決定されるのではなく、一見無造作に散らばっているたいした意味も持たない諸事実の蓄積であることを痛感させてくれるのである。個々の微々たる「事実」の中にも、それに関わる「人間」の言葉や思想が介在することに注目するならば、教会はおろか、人間そのものの存在に関わる問題として、新たな意味を持つことにもなるからである。信仰を持っていても、それだけで人間は完成されるわけではない。もちろん教会の制度や組織を盤石にし、それを生活の原点として生きていくための外的な条件を整えることは重要な第一歩であろうが、正教徒にとっての人生の目的はそうした外的な教会の建設にあるのではない。ところが初期日本正教会が直面していたほとんどの問題がその点に尽きていた。まだあらゆる意味でひとり立ちしていなかったからである。つまりキリスト教を奉じていながら、実際にはキリスト者に不可欠な霊的な生活のとば口にも立つことができず、その遙か以前の段階にとどまっていたのである。

ここで評者が考えるのは、この点にこそ日本正教会が抱えるジレンマがあったことである。明治日本が抱えていた近代化とナショナリズムという方向性が世界宗教たるキリスト教と折り合いがつかないことはもとより自明である。日本人が抱くロシアへの偏見についても、当時の日本が置かれた対外的な状況を考慮すれば一目瞭然である。ならば、そこで明治という時代の外面的特性を取り沙汰して、日本正教の衰退を説明するにとどまらず（衰退にしても信徒の減少や災難といった外的条件のみに左右されるわけではない）、キリスト教の個人的救済という信徒にとっての「孤独な闘い」が、家族や「むら」社会の中でほとんど受け入れられなかった原因にこそ一歩踏み込むべきではなかったか。個人の救済という概念は、正教徒にかぎらず、人間のアイデンティティの確立を前提としているだけに、日本人にとっては克服するに容易ならざる壁であった。一般的に言って、本来なら一人ひとりの性格や環境に帰すべき些細な要因が、正教徒にとって存在

基盤に関わる重要な意味を持ったのはそうした内在的理由によるところが大きい。この観点に立つならば、個々人の些細な事実やデータをないがしろにせず、それをもとに正教会史を再構築しようとする同氏の「人間」洞察のエッセンスを随所に見いだすことができるだろう（その最たるものが、鈴木九八に対する同情的評価の中に表れている）。ここには合理主義的な人生観とは相容れない別のシナリオを読み取ることができるはずである。

だが、言うまでもなく、著者の基本的な問題意識は「教会的」でなく、それどころか、常識的とも言える「リベラルな」歴史観に依拠していた。そのせいであろうか、時として正教徒に特有の行動様式や物の見方に対するある種ナイーブなとまどいや疑念が表明されることに、評者が少なからず驚きを覚えたことも事実である。視点が正教的であればあるほど、例えば、ニコライの政治的見解が同氏の立場からすれば「ウルトラ保守的」と映ったとしても致し方ないが、それが正教の本質的特徴に準じたものであるならば、それはニコライに対する否定的評価の根拠にはなりえない。同様に、セルギイ府主教が「神のものは神へ、カエサルのはカエサルへ」（マトフェイ福音 22 章 21）と言って、「信仰を守り」つつ「現実と妥協する」道を選んだとしても驚くにはあたらない。それらはすべて「福音」の実践であり、キリスト教徒にとっては然るべき判断でもあるからである。つまり、正教会の常識は世間の非常識であり、その世界観が世界を望遠鏡を逆さに見ることに譬えられるのはそのせいである（つまりこの世にとって重要なことは正教徒には小さく、この世で一見些細なことこそが彼らにとって重要なものであるということである）。

わずか数人とはいえ、全員（ニコライ、アナトーリイ、セルギイ他）が修道士（全身全霊を神に捧げることを誓った人たち）であったロシア人宣教師にとっては、政治や戦争といった国家的問題については言うに及ばず、資本、自由民権、平等といった近代化の過程にあって避けては通れない社会問題ですら、救いとは無関係な次元の問題にすぎなかった。その意味で、これらの政治的動向から一時も関心をそらすことができなかつた日本人正教徒の「信仰」が彼らの目には稚拙に映ったとしても不思議はない（三井道郎や岩沢丙吉といった重鎮ですら自分が生きることに必死だったのだ）。果たして、これら宣教師と同水準の信仰（霊性といってもよい）を持っていた日本人が当時の正教会にいたのか、評者は残念ながら名前を挙げるできない。これはひとえに、修道性の概念と実践が日本の宣教理念の中に組み込まれなかつた、その結果、現在に至るまで定着することがなかつたことに起因している。

ロシア文学の日本人正教徒の受容の問題にしても同じことが言える。例えば、著者は瀬沼恪三郎がトルストイを分析するに際し、人間世界を「徳義の世界」と「法律（政治）の世界」に大別したことを紹介し、トルストイの非戦論（徳義）が国家論（政治）に依拠していないとして批判する瀬沼の論法の中に、母教会であるロシアと戦わざるをえなくなった日本正教会の苦しい弁明の現れを読み取ろうとしている。遅きに失した感のあるトルストイの正教会破門を待つまでもなく、ロシア教会がそもそも認めていなかったこの作家のキリスト教に対する数々の誤謬を明治正教会が（ロシアが母教会であるが故他宗派に対して）弁護する必要などあったのであろうか。トルストイは正教徒の小西増太郎と「老子」を共訳するほどの友誼を結んだが、その日本人の弟子に対して、トルストイは正教会がキリスト教宗派の中でも最もキリストの要素を欠いた宗教であると主張するのである。これこそトルストイ思想の異端性を表す最たる証拠ではなからうか。そもそも著者がこの事件を総括して繰り返し口にする「明治正教会」とは具体的に誰を指しているのであろうか。ここに登場する一部の論客を指してそのように称しているとすれば、やはり厳密さに欠けるように思われる。因みに、ニコライはプロテスタントに鞍替えした小西はもちろん、

実務の手腕にはひとかたならぬ信頼を寄せていた瀬沼に対しても、(結局は自らの利益を優先させたことから) ハリストティアニン(キリスト者)としては失格者の烙印を押していたことを忘れてはならないだろう。

だがこうした印象を評者が抱き、幾つかの問題点を指摘したところで、これらを同書の欠点というにはあたるまい。リベラルで公平な視点に立つならば、例えば、ニコライといえどもつねに正教思想の代弁者とは限らず、時にはその弱さや不条理にも目を向け、瀬沼や岩沢等所謂正教会を代表するイデオログたちの非正教的言論にも耳を傾けなければならない。そればかりか、そこで取り上げられている以上、日本の思想に与えたトルストイの影響力に対してもそれなりの敬意を払うべきことは当然の態度でもあるからだ。だがいずれにせよ、自覚的であるか否かの差はあれ、正教という媒体を通して、日本とロシアの異文化の壁を横断する運命を通過した人々はもう一つの人生を持っている、それゆえにこそ発すべきメッセージがあったはずだと考える著者の炯眼さが、その思想の可否はともあれ、十全に伝えられるためには、可能な限り扱うテーマの文脈、つまり正教徒の世界観に立った理解が求められることもまた自明であろう。その意味では、「遣露神学生列伝」は最も成功した一例と思われる。ニコライの目から見れば、三井、岩沢、瀬沼以外はすべて失敗であったが、そうした評価にとらわれずに、各々の人生の意味が改めて問い直され、各々の運命をえぐり出している点は圧巻であり、これぞ氏ならではの切り口と感心させられる。

最後に付記しておきたいのが、氏の研究の過程において、人的繋がりや史料との出会い、発見や挫折といった、研究者としての実体験を率直に物語ってくれていることである。かく言う評者もある個別テーマに関してどうやって調べたらよいかかわからないということを多々経験しているが、とりわけ、ここを起点としてこのテーマに参入したいと考える若い研究者にとっては有益な助言を数多く含んでいることは間違いない。だがまずは正教徒の方々にぜひ読んでいただきたい。日頃から慣れ親しんでいる日本正教会の歴史にも、まだまだ新たな真実が隠されていることに驚かされるであろうし、非正教徒の口から発せられた正教徒についての洞察が、これまでとはひと味違う説得力をもって読み手の心に響き渡ることになるだろうからである。

【新刊書評】

佐藤俊子著『白の舞を架橋に』

佐藤俊子バレエ研究所(〒064-0915 札幌市中央区南15条西6丁目1-17)刊、
2006年8月、1900円

大武由紀子

日本におけるクラシック・バレエの黎明期に、三人のパブロバが登場している。一人は東南アジア公演の途上に日本に立ち寄り、公演した(1922年)世界的なバレリーナ、アンナ・パブロバ。二人目が鎌倉七里ガ浜にバレエスクールを開設し(1922年)、多くの日本人バレリーナを育